

(論文の要旨)

## 「読むこと」の学習指導論の研究—「トンネル式読解」の場合

三輪 民子

### 序章 本研究の目的・背景・方法

本研究の目的は、林進治が昭和初期に考案した「トンネル式読解」の特徴を明らかにすることにより、それを「読むこと」の学習指導論史に新たに位置づけることである。そのことを通して、「トンネル式読解」が持つ「読むこと」の学習指導論としての可能性を探る。

「トンネル式読解」とは、林進治(1911-1987)が全文を読むことが困難な子どもの現状を前にして考案したことが始まりであり、教材文を部分に区切って読み進める方法のことである。当時は、全文通読によるセンテンスメソッドが主流の時代にあって、部分から読み進める方法に着目されることはなく、研究対象として取り上げられることもなかった。

戦前における国語教育史研究においても、部分から読み進める方法については、見つけることができない。そもそも、国語教育研究史が本格化するのは昭和期に入ってからのもので、渡邊(1933)、石井(1939)、峯地(1940)らの読み方教育史研究に共通する点は、垣内(1922)の『国語の力』によるセンテンスメソッドが内容と形式の一元化を提唱し、新しい時代を切り開いたという認識である。

戦後における飛田(1965)、高森(1979)、望月(1984)井上(2009)らによる国語教育研究史においても、部分に区切って読み進める方法に焦点を当てた研究は見当たらず、「トンネル式読解」を取り上げて研究されることもなかった。

以上のことから、本研究において、「トンネル式読解」を新たに「読むこと」の学習指導論史に位置づけることは意義があると考えられる。

「読むこと」の学習指導論史において問われてきたことは、「何を(教材)」「どのように(方法)」指導するかについてであり(府川2018)、併せて、学習者の自発性や活動についても問われてきた(飛田1965)。本研究においては、これらの観点から明治末期から昭和初期の実践例との比較において、「トンネル式読解」の学習指導論を考察する。

研究の方法については、次の3つの視点から行う。1つは、教材文を部分に区切って読む学習指導の考察を行い、「トンネル式読解」と「部分法」との関係性を明らかにする。2つは、「トンネル式読解」の学習指導論をセンテンスメソッドとの関連において明らかにする。3つは、子どもを中心に据えた学習指導論の発展の中に「トンネル式読解」を位置づける。

以上のことを、雑誌『教育研究』(創刊1904年)『国語教育』(創刊1916年終刊1941年)

(論文の要旨)

『教育・国語教育』(創刊 1931 年終刊 1939 年)による指導例を中心に据えて分析・考察することにより、明治末期から昭和初期における学習指導論の特徴を明らかにし、「トンネル式読解」との比較・考察を行う。「トンネル式読解」についての戦前の資料としては、神奈川県女子師範学校附属小学校出版による『国民学校の経営と教法』(1941)と神奈川県女子師範学校附属国民学校出版『国民科授業細目(初二)』(1942a)、『国民科授業細目(初四)』(1942b)を参照する。

## 第1章 「トンネル式読解」とは何か

「トンネル式読解」は、センテンスメソッドに対置し、子どもの読みを尊重する独自の学習指導論を形成した。戦後、一読総合法を編み出す中心人物の一人であった林は、「トンネル式読解」を礎としていたと考えられる。

「トンネル式読解」の特徴の1点目は、文章を区切って読みを進行するという方法である。その文章観として、林は「解釈は叙述に即して進行する」と唱えた。2点目は、「読むこと」の基本は、子ども自身が文章に体当たりして読む行為にあると考えた。それを具現化するために、林は子どもがどのように読み、「感じた」のか、「わかった」のかを尊重した。3点目は、子どもの「読み」と「話し合い」の関係を大事にし、子どもが中心となって読み深めることのできる学習指導の確立を図ろうとした。

## 第2章 センテンスメソッド以前における「部分法」・「全体法」の時代

本章の目的は、「トンネル式読解」と「部分法」との関係を探究するために、「全体法」との比較の中で「部分法」の特徴とその意味を明らかにすることである。そこで、明治末期(1904年)から大正中期(1921年)における読み方教授例を対象として分析・考察を行った結果、この時期は「部分法」と「全体法」が共存し、さらに「全体法」への移行期と位置付けることができる。「全体法」への移行の主な理由としては、口語体の教材が多くなるにつれ、文章を全一と見なす考え方が広まったことが挙げられる。

「部分法」の特徴は、子どもの力に合わせた教授に重点が置かれ、文字・語句指導を丁寧に行いつつ、内容理解を深める(白鳥 1916 など)というものである。このことが「トンネル式読解」と共通する重要な点として考えられる。

「部分法」・「全体法」を問題にした研究論文がいくつか見られた(水戸部 1912、花田 1918 など)が、根本的な「読むこと」の方法の問題としての議論よりも、教材を扱う場合の「区分」として、どちらが適しているかという問題として取り上げられた。なお、水戸部(1912, p. 41)が示した「分節主義」の定義には注目するものがある。「一段落毎に、読方

(論文の要旨)

教授が要求して居る総ての任務を悉く片着けて進めて行くもの」という考えは、部分ごとに読みの「全ての任務」を行っていく「トンネル式読解」に通底するものであると考えられる。しかし、その考えに基づく実践は見られなかった。

一方、「全体法」による教授例においては、「鑑賞教授」が盛んに見られ、個々の子どもの感想を尊重する学習が拡充された。それとともに、「読むこと」とは何かについての議論も盛んになる。芦田(1916)の「自己を読む」という考え方は、読み手である子どもの働きを押し出した提言でもある。このような子どもの読みを尊重する考え方は、「トンネル式読解」に繋がるものではないかと考えられる。

### 第3章 新たな「全体法」としてのセンテンスメソッドの時代

本章では、「トンネル式読解」が、なぜ垣内によるセンテンスメソッドに反して考案されたのかを探る。そのために、垣内(1922)が著した『国語の力』における文章理論や学習指導論、それに基づく実践例を検討することにより、それに対置する「トンネル式読解」の学習指導論を考察する手掛かりとする。

垣内(1922, p.77)は全文通読後に「文意の直観」から出発して、「作者の思想の姿を文の形に見る」ことを求めた。それは、「文を同時的全一の姿に於て意識する」とも説いた。

この「文意の直観」については、実践的には子どもの印象や感想を重視することから、第2章において取り上げた「鑑賞教授」と同様に子どもの個性を尊重する読みの学習のさらなる発展を生んだ。しかし、センテンスメソッドによる読みの目的は作者の思想を捉えることにあり、芦田の「冬景色」の授業(垣内1922, pp.12-23)や本章で扱った「教授例」分析からも教師主導になりがちになる問題点が見られた。田近(2013, p.27)は、「直観における主体の側の問題が欠けていた」とセンテンスメソッドへの批判を述べている。

このような「文意の直観」を巡る批判に加えて、文字・語句指導における問題についても指摘されている。センテンスメソッドにおいては、文章を読めないままに終わる子どもや語彙力低下の問題(渡邊1933, p.48)があったことも指摘されている。

以上のようなセンテンスメソッドの持つ問題点が、「トンネル式読解」を生み出す要因になったのではないかと考えられる。

また、この時期には、前述したような「文意の直観」における子どもの印象や感想を尊重する学習が、一方で、児童本位による学習指導の発展へと繋がり、「独自学習」・「相互学習」と称して、児童どうしによる問答や話し合いにより解決していくという学習スタイルが見られ(河野1926)、「読み取ったこと」と「話すこと」の関係を重視する実践(五條

(論文の要旨)

1925) も見られた。このような児童本位の学習指導の様相は、「トンネル式読解」の誕生がセンテンスメソッドへの批判だけでなく、読み手を主体とする考え方として影響を受けているのではないかと考えられる。

#### 第4章 新たな「部分法」としての「トンネル式読解」

「トンネル式読解」はセンテンスメソッドに対置する方法であること、また、児童本位の学習活動の影響を受けているのではないかということをも第3章において述べた。「トンネル式読解」の学習指導論の考察には、この2つの視点に加えて、軍国主義へと向かう社会状況の中で使用開始となった第五期国定教科書『国民科国語』における「言語教育」重視の考えや「センテンスメソッドを主流にした多様な理論づけと実践的工夫がなされた」時期（飛田（1965））であることを踏まえる必要がある。以上のような視点と「読むこと」の教育状況を踏まえ、「トンネル式読解」の「指導案」分析を基にした学習指導論の特徴をまとめると以下のようなものである。

1点目は、「読むこと」の力育てについてである。文字・語句指導を丁寧に扱うことと同時に「読み - 話し - 書き」という一連の学習活動を有機的に結びつけることを重視した。特に2年においては、「小さく分節する」ことで、「正確に読み取らせる」ことや「読みぬかせる」力を育てることに力を入れていることが見てとれた。林は、「言語の生活化」を図ることが「解釈操作」と併せて重要であると説く。

2点目は、子どもの主体的な読みを中心に据えた学習である。「トンネル式読解」は、子どもが文章に向き合い、叙述に即して読み進めていく営みを「読むこと」の学習の基本とし、「話し合い」を中核に据えて内容理解を深めるという学習指導である。このような学習指導論がセンテンスメソッドとの決定的な相違と言える。「トンネル式読解」においては、個々の読みが「話し合い」において深められ、それがまた個の読みを深めるという教室における読みの姿を追求しているところに意味があると考えられる。

3点目は、「トンネル式読解」ならではの独自の学習である「予想」と「総合」についてである。「予想」は、読んだ部分から、その先どのように展開するのか、文章の次の展開を見通しながら読む力を育てることになる。「総合」は、部分から読み進め、一定のところまでそれまでの内容をまとめる学習を行い、その後、読みを見直し、総合して読み進めることであり、部分が全体へと統一されていくための重要な学習と言える。「トンネル式読解」が明治末期から大正初期に見られた「部分法」とは質的に違うことが、この「予想」と「総合」の学習からも窺える。

## 終章 成果と課題

本研究の成果と課題をまとめると、次の通りである。

1点目の成果は、「トンネル式読解」と「部分法」との関係性を明らかにしたことである。両者は子どもの読みの力に合わせるという考え方や文字・語句指導を丁寧に扱うことにより内容理解を深めるといった点において共通性を持つ。これは、「トンネル式読解」の重要な特徴の側面を表す。しかし、「部分法」は、文章観を持つ学習指導方法として発展することではなく、教材「区分」としての取り上げられ方に終わる。一方、「トンネル式読解」は、部分を総合して読み進め、全体への統一した読みをつくっていくという文章観を持ち、この考え方は「部分法」には見られないものである。これらのことから、「トンネル式読解」は、「部分法」の延長線上に位置づけられるものではないと考えられる。

2点目の成果は、「トンネル式読解」の学習指導論をセンテンスメソッドとの比較において、考察したことである。「トンネル式読解」とセンテンスメソッドとの際立つ相違点は、全文通読による「文意の直観」にある。センテンスメソッドの実践が、「直観」により作者の「想」を仮定しつつ文意を捉えていく過程において、教師主導にならざるを得ないことを見た。林(1941, p. 72)は、「教師主導」では、子どもの読みの力が育たないと訴え、「児童の読みの自然」を尊重することを基本にした「トンネル式読解」による学習指導を考えたのである。「トンネル式読解」は、叙述に即して部分から読み進める読み手の主体的な行為に立脚し、話し合いにより深められるという学習指導論であることを実践的に検証することができた。また、「予想」や「総合」という学習が、部分が全体へと統合されるという「トンネル式読解」ならではの考え方を示すということを明らかにすることができた。

3点目の成果は、戦前における子どもを中心に据えた学習指導論が、どのような様相で発展してきたのか、その流れの中において「トンネル式読解」はどのように位置づけられるのかについて明らかにしたことである。そして、子どもを主体とする学習指導論として「トンネル式読解」の可能性を見出したことである。

戦前における子どもを中心に据えた学習指導論の始まりは、開発主義による教育論に見ることができ、その後の自学補導による教授など、子どもの自発的な活動を重視する指導論は「全体法」の進展とともに発展したことを見てきた。大正自由主義教育により一層開花した子ども中心の教育の後に台頭したのがセンテンスメソッドである。この大正年間において、自学を重んじる学習に質的な発展を見ることができた。それは「鑑賞教授」による子どもの個々の感想を生かす学習である。外的な子どもの自発的な活動ばかりでなく、

(論文の要旨)

読み手としての内的な子どもの読みを尊重する学習の考え方が生まれたということである。その流れは、教師主導となったセンテンスメソッドにおいても、「文意の直観」という子どもの印象や感想の尊重という形で生かされていった。さらに、「独自学習」や「相互学習」「協働学習」といった子ども自身の読みを基にした相互の話し合いという新たな活動による読みの形態をも生み出した。「トンネル式読解」は、センテンスメソッドとは対置する立場であるが、以上のような子どもを主とする学習においては、歴史的な内容を継承し、同時代における学習者論の影響を受けていると見ることができる。しかし、これまでの学習者論は、文章を全体として捉え、根本的には教材中心の理論に立っている。「トンネル式読解」はそれとは反し、読み手主体を中心に据える考えに立脚する点において、戦後に繋がる学習指導論としての可能性を持つと考える。

以下、課題を3点挙げる。

1 点目は、戦前における部分から読み進める学習指導論や実践の発掘である。地方で発刊されている雑誌にも目を向け、対象範囲を広げて発掘することにより、部分から進める学習指導論についての考察が深まり、新たな意味を見出すことができるのではないかと考える。

2 点目は、「トンネル式読解」が唱える読み手を主体とする学習指導論についての新たな探究である。その一つは、叙述に即して読む主体的な読みの行為と文章（教材）との相互的働きかけから創造される読みとはどのようなことなのか、の解明である。二つは、話し合いにおける個の読みと文章（教材）と集団との相互的働きかけにより創造される読みの探究についてである。この課題は、教室という空間に創り出される読みのメカニズムを個々の子どもと集団、教材との関係において探ることであり、現代にも通じる問題と考える。

3 点目は、「トンネル式読解」が、戦後、どのような形で理論的、実践的に繋がり、発展するのかを追究することである。特に、第1章で述べた、戦後における一読総合法との関連を検証することは、2点目の課題と関わって、戦前から戦後へと連続した学習指導論として探究することに繋がるのではないかと考える。